

## 第3回委員会（先進地視察）の報告について

### 1 多賀城市立図書館視察報告（ポイント）

・CCC（カルチャ・コンビニエンス・クラブ）が企業誘致に応じてくれ、指定管理者となった。震災復興のシンボルとして整備。

・新しい図書館は、人材と市民生活を第一にしている教育施設である。文化センターもあるし、史跡や東北学院大学の工学部もあるなど教育文化の伝統的な施設があるため、東北一の文化交流地点、中核施設にしようとなった。

・市民利用率50%を超えることが、目標だった（人口6万人）。今までの市民利用率が1割であったため、目標値はかなり高いものである。

・コンセプトは、家族が絵になる図書館。図書館は家であり、成長を見守るところ、癒しであり、自分の空間が確保されているところである。滞在型。教育、繋がり、行けばいつも何かやっている、人が集まる施設になる。上の階に上がるほど静かになる。1階はリビング、2階は書斎のような空間、3階は専門書などがある学習の場をイメージしている。

・開館時間については今までの1.3倍。閉館時間を17時から21時30分までに延ばし、365日開館している。大変喜ばれている。

・サービス機能については、タブレット端末を16台配置した。サービス機能については、全くやっていなかったわけではなく、充実させた。特に話題になるのが読書通帳である。大人でも料金を支払えば使える。小中学生には無料で配布していて、読書の励みになっている。

・目標値は、旧図書館時、来館者数10万人、図書貸出33万冊だったものを、新館では、来館者数120万人、図書貸出66万冊と設定。これまで、A棟（図書館が入っている棟）に来館した人が、4月26日までで20万人、5月18日までで30万人、7月2日までで50万人を超えている。120万人という目標を立てたが、10月頃に100万人を超える勢いとなっている。

#### （質疑応答）

Q 選書は誰がしているのか。

A 指定管理者が提案し、指定管理者側で選書会議を開き、リストを作成してもらう。その後、リストを元に教育委員会で審査をするという流れになっている。教育委員会に司書資格を持つ職員もいるし、指定管理者に丸投げの発注ではなく、教育委員会が責任を持って市民のリクエストにも応えている。

Q 図書の利用カードは、Tポイントカードなのか。

A Tポイント付きのカードか旧図書カードか選べる。Tポイントカードについては、図書館の情報が、CCC側に行くことはないようになっている。純粋に図書館を利用するためだけのものになっている。

Q どちらのカードの利用率が高いか。

A Tポイントカードの方が、利用率高い。新しく作る人は特に多い。子供の場合は、旧来のカードが多い。

Q 選書は、市民のリクエストを受け付けるシステムがあるのか。

A ある。全てではないが、市民のリクエストは検討の材料としている。ベストセラーの本をたくさん入れてほしいというリクエストがきても、原則副本は持たないことにしている。人気の本を置いて、利用率を上げようということはしていない。

Q 多賀城駅と図書館との接続は、どうなっているのか。

A 駅から歩いて行ける距離にある。建物は別々になっている。

Q 指定管理ということで職員が結構いる感じがするが、分館含めて指定管理なのか。

A 分館含めての指定管理である。

Q 移動図書館について、学校図書館にも指定管理者側を派遣しているのか。

A 指定管理の前から小学校の学校司書は図書館から派遣していた。指定管理になったのをきっかけに中学校にも派遣するようになった。学校の司書教諭と協力しながら、学校図書館を運用するのが学校司書である。分館は地区公民館の中にあり、2館ある。その他に、文化センターの中に中央公民館の図書館があるが、少し離れた場所にあるので、その中に図書館の分室を置いている。そこを運営しているのが図書館から派遣されている司書である。公民館の図書館は月曜休みになる。

Q 365日開館だと思うが、図書館を利用する人が増えたのはどのような層か。

A 駅利用者であった若い層やサラリーマンが増えた。中学生、高校生、大学生も増えた。

Q 開館して好評なサービスは何か。

A 土日や夜9時までの開館が喜ばれている。人が増えて、対応が大変なときあるが、借りられている本も多いし、喜ばれていると思う。

Q 職員体制65名ということで交代勤務だと思うが、2交代か。

A 3交代でしている。社員だと8時間労働で、2交代くらいでしている。契約社員やバイトの人だと本人の希望や事情により3交代くらいでやっている。

Q 一番忙しいピーク時で、何人の勤務体制となっているのか。

A 30人くらい。土日だと図書館だけでなく、蔦谷書店も忙しいので、共有のスペースにも人がいて、整理もしなくてはいけないため、30人くらいいる。

Q 仙台市が近いと思うが、利用者カードの多賀城市内と市外どれくらいの割合か。

A 市内が6割。次に宮城野区（仙台市）、塩釜市と続く。

Q 指定管理者と生涯学習課の役割・リスク分担において、ポイントや気を付けているところがあれば教えてほしい。

A 年度協定をしっかりと結ぶこと。例えば、修繕のときなどの約束。裁量でやっていいこと、許可をとらないとやってはいけないことを書面できちんと取り交すのが大事だと思う。多賀城市は指定管理者の施設が多い。相手方によってどれくらいの度量なのかを見ながら気を付けている。月に1、2回指定管理者と会議をして頻繁に顔を合わせ、苦情や要望の共有化をしている。社風、行政としての風土によって調整が難しいところもあるが、人と人との繋がりだと思う。

Q 生涯学習課で図書館に従事している職員数は、どれくらいか。

A 2人がメインでしている。2人とも図書館で働いていたので、仕事内容は理解している。

Q 駐車場の運営だが、料金収入だけで運営しているのか。それとも市からお金が出ているのか。

A 部局が違うので詳しくないが、駅前の南側C棟（駐車場）は駅を利用する人は誰でも1時間無料になっている。図書館や子育て施設利用者は2時間無料。多賀城市は車社会なので、このような設定となっている。図書館に入っているレストランで駐車場のサービス券を配っている。

自転車については、50台無料で、通勤・通学者の場合は、50円で止めている。

## 2 紫波町図書館視察報告（ポイント）

・毎朝の開館時間には、司書がデパートのように玄関でお出迎えをする。市民との声掛けを意識してのもの。市民にも少しずつ浸透している。face to face のコミュニケーションが一つのキーワードとしている。

・施設の不便さの苦情もコミュニケーションの始まりと考えている。

・出来て4年の図書館で、町としては初めてのきちんとした図書館で、トライ&エラーで取り組んでいる。しがらみが無いという強みもある。

・町の位置としては、半径30kmで人口62万人ぐらいの圏域を形成。北東北では一の人口圏を構成。食糧自給率170%。農業人口は10%未満だが、農業が基盤。農業が元気でない、紫波町も元気でない。

・図書館建設の要望は、ここ10年ぐらいで大きくなってきた。市民活動が盛んになってきたことも要因と考える。オガールプロジェクトの中でも、集客力のある図書館の整

備が考えられてきた。

・現在、図書館所管は、補助執行で町長部局が担当している。教育施設以外としての活用も図っていききたいため。

・住民説明会をしたが、計画当初は、図書館不要の意見が多かった。それよりも道路などのインフラの方が優先。完成した途端、反対意見は無くなった。だからと言って、図書館に来る訳でもない。なので、もう一つ見える形で成果を表したいということで、ビジネス支援（農業支援）に取り組んだ。秋田県立図書館は東北管内では、その道ではトップクラスで、紫波町では山崎副館長から指導を受けて取り組むことにした。

・図書館法上の図書館にプラスして、コミュニティ、経済、産業を情報の輪でつなぐ役割を担っていると考えている。

・町のまちづくりの目標達成に向けて、図書館として何ができるかを考えた場合、本の貸出しという通常の業務に加え、常に外と連携を図り、つながりを持ち、イベントなりサービスを構築していくことを考えている。司書が、地域に飛び出してネットワークを構築。図書館だけでは、マンパワーの限界があり、役場の企画課も協力して、事業を実施している。

・ひろがる図書館を目指している。

・昨年、調べる学習コンクールに取り組み、初回で、町内から大臣賞の最高賞が出た。

・児童フロア（赤ちゃん部屋含め）は、施設配置上、静かなスペースと賑やかスペースの区分を付けるため、前面に配置。

・運営体制は、正職員1名と嘱託11名。

・町内の図書館利用カードの登録数が伸びない。1/3 満たない。ここが課題。

・町民満足度調査を実施しているが、下水道などの生活インフラと比較すれば図書館の満足度、重要度は低い。オープン以降上昇しているが、重要度が満足度を越えられないでいる。この辺の分析が難しい所と考えている。

#### （質疑応答）

Q デザイン会議との現在の関わりは。

A 稼働後は、時々いらっしゃる程度となっている。

Q 図書館の職員の人材育成は、どうしているのか。

A 実際には、能力がある者が、最初にいたというのが大きい。秋田県立図書館の協力のもと、現在の主任司書を紹介してもらった。今も、その主任司書のネットワークが生きている。司書を育てるのは実際難しい。図書館の中だけで仕事をしたがる。そのため、外の人と話すのが苦手。今は、イベント担当を置いて、外に出てもらうという実践でもってやっている。講習会もやっているが、あまり効果無いと思っている。

Q 62万人の圏域ということだが、北上、花巻、盛岡などの登録者数は、どうなっているのか。

A 町外の登録者数は伸びている。一番多いのは、隣町の矢巾町。紫波町は、産直の町（町内10箇所）でもあり、ドライブついでに寄る方が多い。

Q 図書館の基本構想、基本計画策定時点では、4年後の現在の状況まで（イベントや企画の充実）にイメージ出来ていなかったと思うが、現在の至るまでのモチベーションはどこにあったのか。

A 結局は人であると思う。自分も、建設当時は、単に図書館ができるぐらいにしか思っていなかった。その後、館長に就任する際、町長から図書館らしくない図書館を作れと言われてきたことで、いろいろと取り組んでこられたのかなと思う。ラッキーだったのは、3年前に開催した岩手文庫というイベントで、出版社等と繋がりが出来た。それをキャッチしたのは、現在の主任司書であり、資質の部分も大きい。そこから、ひろがっていった。

Q 図書館として力を入れている分野として、子どもたちの読書支援、0歳から高校生までとあるが、どのような取り組みを行っているのか。

A 3割ぐらいが児童書になっているが、貸出しの占める割合が、50%となっている。その意味で、もっと児童書の充実が必要と考えている。お話し会はやっている。ボランティアも5つある。司書では、サイエンスお話し会をやっている。その程度しか行っていない。毎月の企画展示では、大人部門と子ども部門あるので、力を入れてやっている。総じて、模索しているところである。